百済武寧王と加唐島

九州大学文学部４年生　朱樹彬（ズゥ・スビン）

武寧王の生涯

- **武寧王**（462年 – 523年）は、百済の第25代の王（在位：502年 – 523年）。『三国史記』百済本紀・武寧王紀によれば先代の牟大王（東城王）の第2子であり、諱を**斯摩**、若しくは**隆**とする。『梁書』では余隆（誤）、『日本書紀』では、加須利君（かすりのきし、第21代蓋鹵王）の弟の昆伎王の子、名を嶋君とする。『三国遺事』王暦では『三国史記』と同じく、諱を**斯摩**とする。おそらく、東城王の異腹兄弟であると推定される。東城王が501年12月に暗殺された後、暗殺者の衛士佐平（禁軍を司る1等官）の苩加は加林城（忠清南道扶余郡林川面）に拠って反乱を図ったが、すぐに鎮圧された。以後、22**擔魯**制を実施し、王族を派遣、朝廷による地方統制を強化した。なお、武寧王は高句麗を撃退し、漢江流域を修復する。五経博士を倭国に派遣する一方、 521年には中国南朝の梁に入朝して「百済はかつて高句麗に破られ何年も衰弱していたが、高句麗を破って強国となったので朝貢できるようになった。」と上表した。これにより梁からは、もとの〈行都督・百済諸軍事・寧東大将軍・百済王〉から〈使持節・都督・百済諸軍事・寧東大将軍〉に爵号を進められた。百済の安定期を拓いた王は523年5月に崩御、武寧王と諡された。

武寧王陵

- 1971年、韓国忠清南道公州市(熊津)の宋山里古墳群から墓誌石が出土され、武寧王陵と特定された。墓誌石には「寧東大将軍百済斯麻王、年六十二歳、 癸卯年（523年）五月丙戌朔七日壬辰崩到」と記され、王の生没年代を表す貴重な史料となった。古墳は王妃を合葬した磚室墳で、棺材が日本にしか自生しないコウヤマキであったことも大きな話題となった。この他、金環の耳飾り、金箔を施した枕・足乗せ、冠飾などの金細工製品、南朝の梁から舶載した銅鏡、陶磁器など約3000点近い壮麗な遺物が出土された。

武寧王生誕の加唐島

- 加**唐島**は佐賀県の東松浦半島の北部の大韓海峡にある島である。武寧王の出生の話として《日本書紀》に、「百済の加須利君（蓋鹵王）が弟の昆伎王に妃を帯同させ、倭国に派遣する際、妃に、途中で子が生まれれば送り返すよう命じた。一行が筑紫の各羅嶋（かからのしま・現在の加唐島）まで来たところ、一児が生まれたので嶋君と名付けて百済に送り返した。これが武寧王である」としている。

百済武寧王生誕記念碑

ご静聴ありがとうございました。